

⑤湯殿山本宮（三山総奥の院）

出羽三山七大御秘所の中で、湯殿山（図-1）に着目する。

出羽三山総奥の院と称され、同三山詣では「東の奥参り」と云われたが、その最終目的は言うまでもなく、三山の中でも特別に神聖視された、最も神秘性の高い霊場たる湯殿山の御神体（御宝前、湯殿山大権現）である。全体が大日如来、あるいは金胎曼荼羅両部界とも言われる。



図-1

1. 行程

2017(H29)年11月1日に閉山祭を行ったと、事前に出羽三山神社社務所から聞いていた。同年同月7日(水)、自宅から湯殿山ホテル跡まで自家用車で行きそこに駐車した。——なお、3日後の11月10日(土)も補完調査のために行ってきた。

- 9時10分 ; 湯殿山参籠所への山道を歩き始めた。
- 9時55分 ; 同参籠所前の大鳥居に到着した。
- 11時30分 ; 御沢駆け(梵字川・仙人沢に祀られる神仏抖擻^{とそう})を行い、湯殿山本宮(以下「本宮」という——)に到着、参拝した。その後付近一帯を散策した。
- 13時35分 ; 湯殿山ホテル跡に戻った。

2. 現地とその状況

標高1,000mの当りは葉が落ちているだろうと思い行って見た。案の定すっかり落葉し見通しが効く状況にあった。当日は、10人程の設備・建築の工事関係者が入り、建造物の冬籠もりに向けて同参籠所に隣接

する売店、同本宮手前駐車場の売店・公衆トイレなどの雪囲い等を実施していた。本宮御神体参拝の場所の囲いや仮設建物は全て解体され、御神体は丸裸の状況であった。こちらには誰もいなかった。

工事関係者の出入りは当然ながら自由であったことから「語るなかれ」「撮影するなかれ」と言われても、興味のある人は自由に撮影したはずである。自然界の樹木の葉は全て落ち、どうぞ自由に撮影してください、と言わんばかりの状況であった。もちろん「撮影するなかれ」の注意書きは撤去されてどこにもなかった。

図-2のとおり、本宮を形成する仮設建物や飾り付け、御神体（＝御宝前／細部は後記）を囲む（隠す）覆い等は全て解体されていた。また、月山へ至る登山道の梵字川に架かる橋も撤去されていた。橋の撤去は想定外であった。来年の4月末から始まるゴールデンウィークより通られるようになるようである。なお、湯殿山開山祭は、例年は6月1日のようである。

現地に出向いたこの時期は、冬至に向けて太陽が南に傾いている、本宮ご神体はほぼ真北を向いており、昼近くであり撮影しようとする逆光になった、特にこの日は快晴であり、太陽光がお湯と湯気に反射して、神秘性が増していた。



図-2

3. 「湯殿山」の概要について

まずは、簡単に整理しておく。出羽三山の開山について、江戸時代までは、羽黒山側は、三山共に蜂子皇子を開祖と云い、一方、湯殿山側は、真言宗宗祖の弘法大師空海を開基とした。江戸時代、羽黒山側が湯殿山をも天台宗で統一しようとした天宥^{てんゆう}に反発し、大いに紛糾したことは有名である。明治は神仏分離以降の現在は、湯殿山も蜂子皇子を開祖としている。

さて、古来「湯殿山」とは、現在の「湯殿山本宮」と云われている所（図-2では“湯殿山神社”／標高約1,050m）である。社殿はなく自然のままの、野生のままむき出しのお湯が湧き、滲み出ている茶色の、赤褐色の半球体の巨岩、赫岩（赤見を帯びた岩）を御神体（御宝前、靈巖、^{れいくつ} 靈嶮、^{ほうくつ} 宝窟、^{いんし} 淫祠）としている。御神体のことはここで一旦閉じて細部は後段に記載する。

なお、地名・山名としての「湯殿山」は図-1にあるとおり、標高1,500mである。

日本人の信仰の原点ともいべき自然崇拜を今に伝える靈験（巖）あらたかなお山である。内藤正敏著「修験道の精神宇宙（青弓社）」には「出羽三山の総奥の院として、過去・現在・未来の三山全ての時間が凝縮した空間であるとされた。つまり、三世^{さんぜ=さんざい}の全ての時間が同居している、始まりもなければ終わりもなく、時間の境界がない宇宙の始原のような時空の場所である。人がみだりに近づくことを禁じた出羽三山の最大最高の秘所とされている、『羽黒三山古実習覧記』には“月山湯殿山女人禁制の儀は、極楽并^{へい}寂光^{じゃっこう}は女人女闕候故御座候”と――一月山と湯殿山は女人禁制なのは、極楽浄土であり、かつ（並びに）寂静^{じゃくじょう}の境地と真智^{しんち}の光を持つ土（土地）である御神体は女人女闕つまり女陰だということである――」

と書かれている。

4. 本宮御神体の参拝

通常期、4月末連休から11月3日頃までが開山期間中となる。11月1日は閉山祭を行い、降雪の状況を見ながら同月3日までは参拝可能としている。

参拝エリア内に入る前に靴を脱ぎ裸足になり、**図-3**のとおり3の入り口で500円を支払い、お祓いを受けてから御神体の方へ行く。これ以降の写真撮影は厳禁である。御神体の形態・雰囲気は頭の記憶にしまう他はないが、私はどうしても写真を撮りたい方である。しかし、参拝には何回も行っているが、参拝の門を潜ってからは隠し撮りも含めて一枚も撮っていない。神職から一度注意を受けた。

ところで、千歳栄著「心の原風景（MOKU出版）」には、**図-4上**4上が載っている。これはどこかの隙間から望遠レンズで撮ったものだろう。本は公開されているから当然神社関係者にも知れ渡っていることではあろう。

「写真撮影は厳禁」と強く言われるほどに、反抗・対抗心が出て来て撮りたくなるもの。**図-4下**4下は、2017(H29)9月25日(月)に私が撮影した写真である。登山道沿いの手前に撮影禁止のネットが張られており、上から押し下げて撮ったものであるが、樹木・草木が繁茂しており、これが精いっぱいである。梵天で飾ると、ただの岩は岩ではなくなる、まさに神聖さが増すというもの。何となく首を垂れるとご利益を頂戴するような気分になるものである。

図-55は市村幸夫氏が撮影したもので、岩根沢三山神社（旧日月寺）内の湯殿山絵馬である。

いずれにしても、御神体の秘所為るが故に隠したいのである。お金を払った者だけには御神体の外観的雰囲気（様子）を見せるが、秘所中の秘所為る後記の「女人女闕」は絶対に見せないによけつのである。

5. 御神体に宿る神仏かみほとけ

前出内藤正敏著同書を参考にすると、湯殿山では古事記・日本書記に出て来る神に異称を付けたり、独自の神を登場させている。**図-6**6、ならびに**図(表)-7**7は、同書記載から

拝借転用したもの。この巨岩の御神体には密教金剛界は①御注連八大金剛童子が宿り、右側の低い半球体には胎蔵界は⑦仏性池大聖無量寿仏が宿っているとおしめにする。全体が大日如来（金胎両部界）であるとする見方がある。



図-3



図-4



図-5

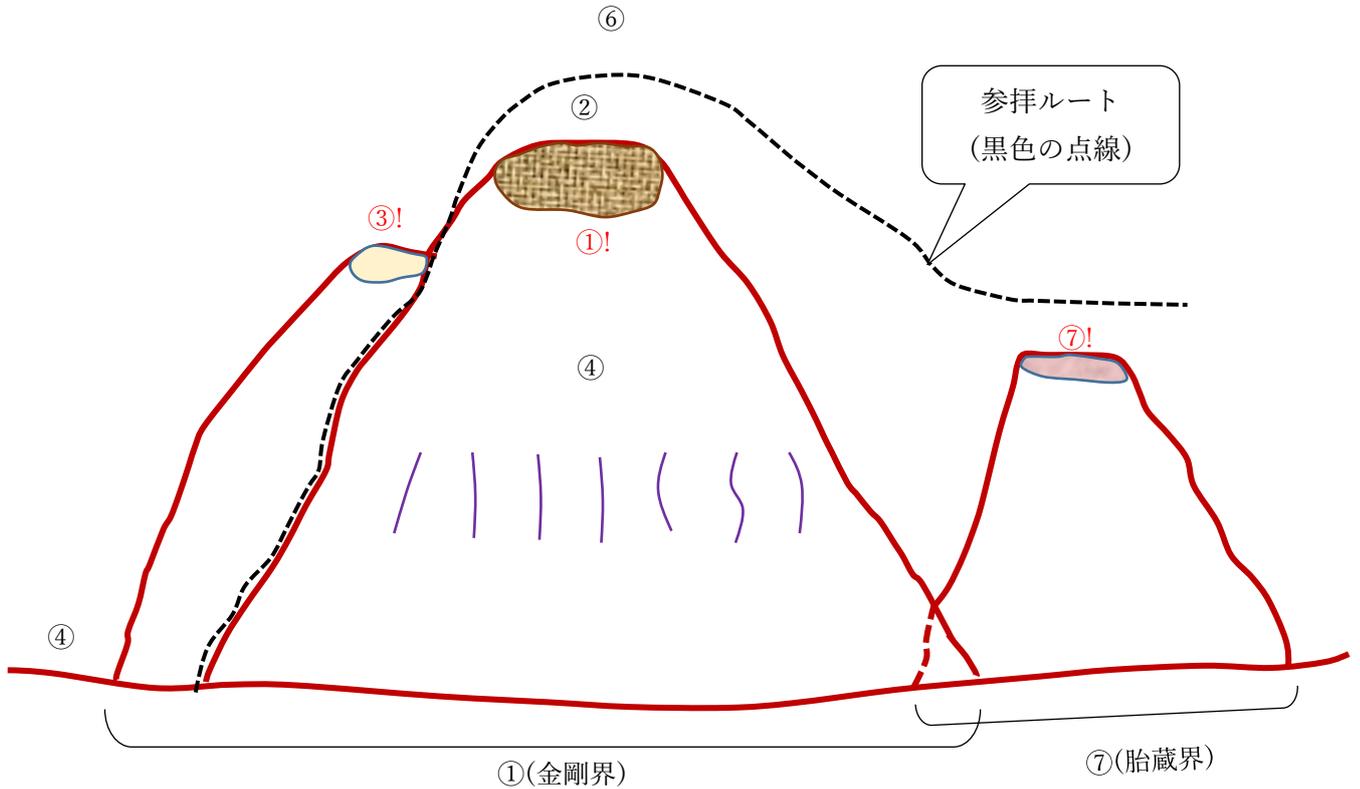


図-7

なお、私の現地確認では、③「御井の神」と刻字された石塔を確認出来兼ねずにいる。

図(表)-7

	総奥の院・御沢仏（旧来）の名称	神道式（現在）の名称
湯殿山 奥の院	<small>おしめに</small> ①御注連八大金剛童子（金剛界）	<small>みやま</small> 湯殿の御山の大神
	<small>おうらに</small> ②御裏三宝荒神	<small>かぐつち</small> 迦具土の神
	③水神権現	御井の神
	<small>おんまえごしんぶつ</small> ④御前御身仏	御前の神
	<small>おながれ</small> ⑤御流釈迦文殊普賢菩薩（お湯の流れ）	出湯の神
	<small>てんしょうだいじん</small> ⑥天照大神	<small>あまてらすおおかみ</small> 天照大神
	<small>ぶすいけ</small> ⑦仏性池大聖無量寿仏（胎蔵界）	真奈井の神
御沢仏	<small>おたきはだいしょう</small> ⑧御滝大聖不動明王	御滝の神

6. 現地本物の御神体の全体像

図-6・図(表)-7によると中央部の大きな半球体（疑似円錐体）を金剛界（男性原理）と見立てているのに、現地はその下部（下半身）に「女人女闕」部（女性原理）を持っている、矛盾のように見えるがそうではなく、元々この巨岩御神体全体を金胎両部の大日如来と見立てていることから齟齬は生じない。

11月7日（水）当日の現地は図-8～図-10のとおりであった。

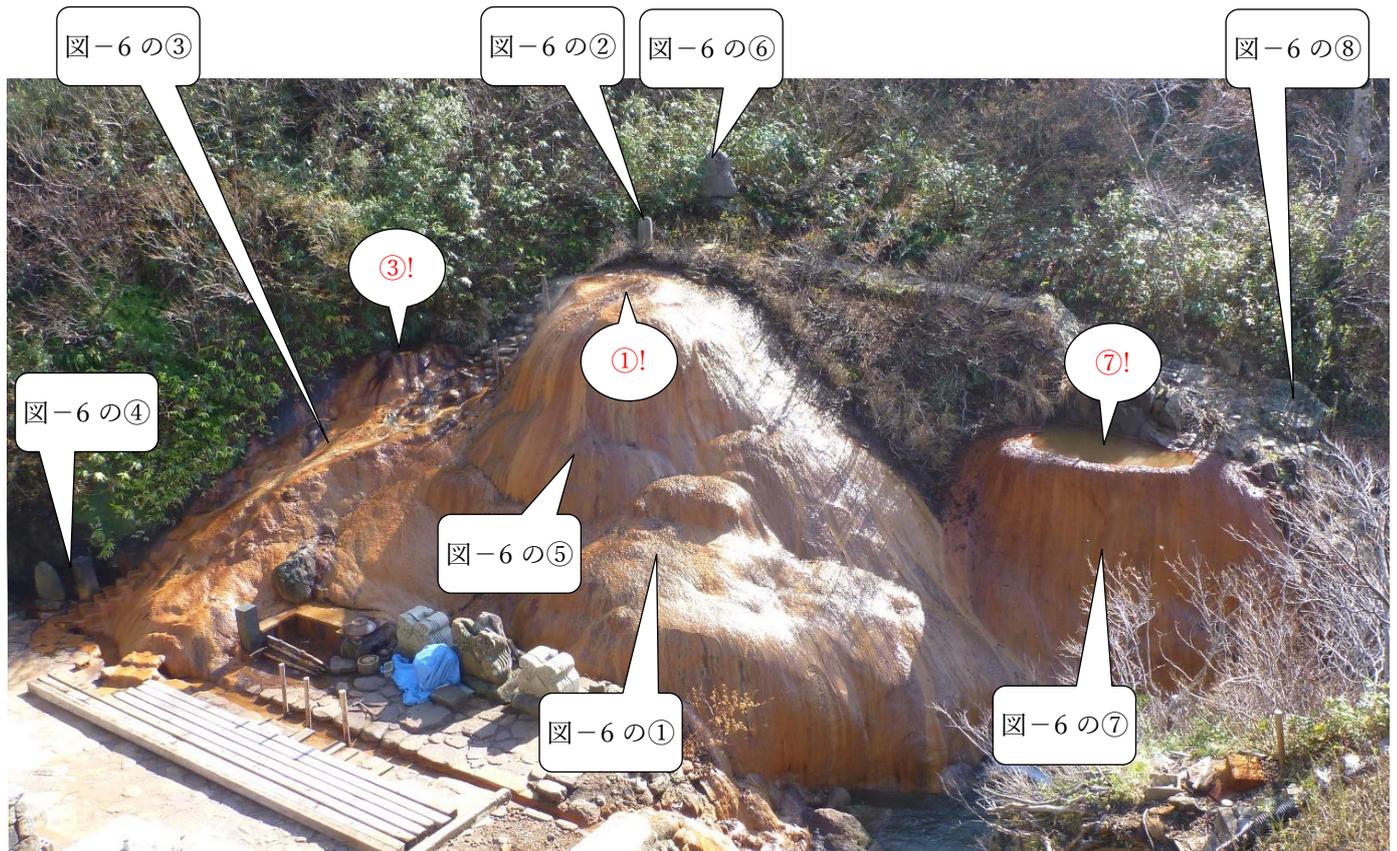


図-8;湯殿山本宮の御神体の全体

率直に申して、初めて全貌に触れ「女人女關」部を目の当たりに見た時、まったく予想出来なかったものに出会った感じで感激・感動・感無量となった。形といい色合いといい、誠に深遠な神秘を感じた。他方で見てはならぬものを見てしまったという呵責、罪悪感のようなものも少しはあった。

尤も、考えて見るに、「開山祭」は、御山の御神体に神の靈魂を吹き込む・入れ込む儀式であり、「閉山祭」は逆に神の靈魂を抜き出す儀式である。これらの儀式を行うことによって、御神体は復活・再生し、あるいは休息に入るのである。したがって、閉山祭を行った後は、御神体と言われる岩体はただの石、湯の湧き出るただの岩、自然にあるがままの無機質物体になったのである。岩に神仏が宿る云々は人間の意思の投影であり、人間の意思を抜けばただの石になる。だから、私が撮影したのは、湯殿山は奥の院の御神体ではなく、「ただの岩」なのである。

しかし、この日は放射冷却で快晴、太陽が天頂にあったものの現地は冷え込みもあり、3個所の頂部から湧き上がったお湯は、もうもうの湯気を発し、岩体全体にくまなく流れ落ちる湯に太陽光が反射していた。まことに神々しい風景であった。「ただの岩」ではあるが、真言密教の世界！ 私の心の持ち様、傾け方次第だが、まさに神々しい神・仏の示現だと、有り難く、真に有り難く感じた。湯殿山大権現の大神を讃え、出羽三山三語拜詞[※]ならびに三山拜詞[※]を唱えて参拝しました。

参拝期は、参拝者は入り口で神主のお祓いを受けて石で囲まれた廊下を歩いて、ご神体の内部に入るが、最初に足を止め、頭を垂れて柏手を打つ所は、この「女人女關」の前なのである。幣・神鏡などを置いており、秘所（ご神体）故にこのようにもろに見ることはもちろん出来ない。

^{ふだらく}
^{によけつ}
^{ぬさ}
(※) 前記「③・④（月山）東西補陀落」を参照のこと。

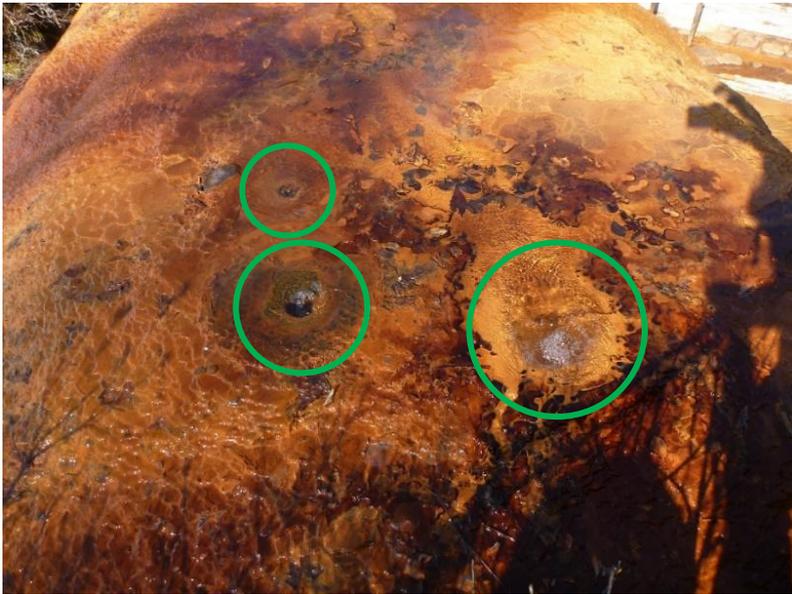


図-9；図-6①!の処、ポコポコと湧き出る



図-10；前出の「女人女關」なのか？
下は露溜り（ほぼ真北向き）

7. 御神体の特徴

(1) 外観とお湯の湧き出し

大きくは3箇所よりお湯が出ており、このようなものを「噴泉塔」ともいうが、観察の状況の要点を記述する。

✓1；一つ目は図-6・8の①部。全体の外観は、下部に従い太くなっている、見る角度で色々と想像出来るが、金剛界にも係らず、女体はもとより臨月の姿でもある。巨大な肉の塊（肉塊）に見える。真北向きの中より下部は「Y字形&三角形」の割れ目状で掘れている部位があり、ここが前出の「女人女關」であろう。

中央の巨岩の頂部は、他の2つ（図-6・8の③!と⑦!）とは違って、図-11のとおり、ほぼ水平に近くつるつる坊主の頭状になっている。お湯は、ここ①!部天辺の3箇所てっぺんの小穴からポコポコと湧き出ている、図-9を参照のこと。お湯が溜るような掘れた状態にはない。

✓2；二つ目は図-6・8の③部。図-12を参照のこと。外観は御神体全体に向かって左端の岩体で、一つ目の巨岩部と一体にも見

図-11



える、小ぶりであるものの頂上にお釜を抱く円錐形（頂部は播鉢状）を成している。お釜部の外側は薄茶色と黒色の縦縞模様になっている。お湯は、ここ③!部からはこんこんと湧き出している、噴出湯量は3箇所（図-6・8の①!・③!・⑦!）の中で一番多い感じがする。

✓3；三つ目は図-6・8の⑦部。全体に向かって右端の岩体で、全体の高さは低くやや裾を広げ丸みを帯びて台形状を成している。頂部は水平の東西に細長い池状になっており、図-13のとおり。お湯は、ここ⑦!部からも間断なく溢れていることから間違いなく湧き出ているが、表面からは僅かな泡を視認出来る状況、溜っているという状態にあり、湧き出し口はお釜の内部と思われる。



図-12

お湯の湧き出し状況をデフォルメ（deformer／対象を変形させて、簡素表現すること）すると図-14のイメージである。

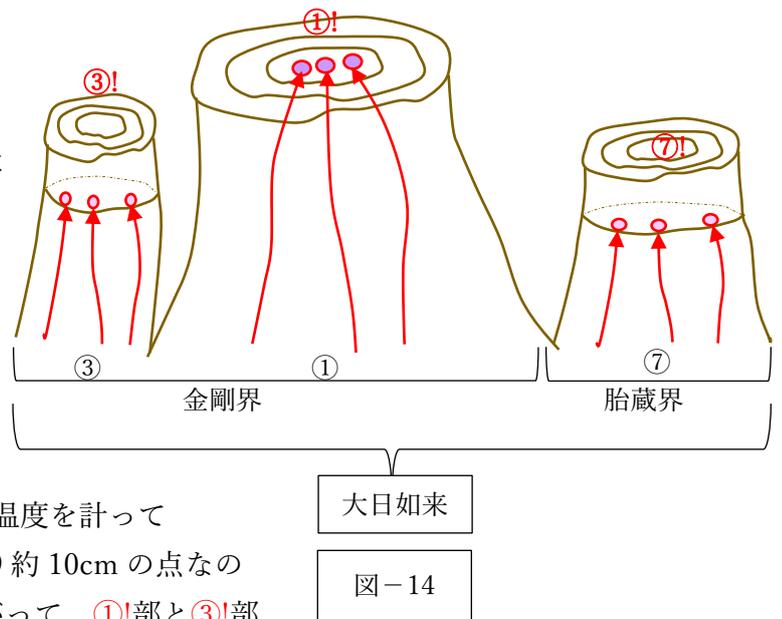


図-13

全体的には、この御神体は女性原理（女凹体）にも見えて胎蔵界大日如来と言ひ、一方で、男性原理（男凸）にも見えて金剛界大日如来とも言ひ、結果して、金胎両部曼荼羅とも云われる所以である。外気温（空気）が低いうちは、もうもうと湯気が立ち、単なる温泉からのものとは思えぬ神々しい、奇怪な何かの粒子（男の精子）が飛散しているようにも見えた。

(2) お湯の味と色

舐めるとかなり塩辛く、鉄錆びの味がする。岩全体は茶褐色・濃いオレンジ色であり、これは塩分や鉄分の影響であろうと思う。また、黒色はマンガン酸化物(?)ではなかろうか。火山現象の一部が地表に現れているのだろうと思う。



(3) 温度等水質検査

水温計（歴としたものを購入した）を入れて温度を計ってみた結果は図(表)-15のとおりである。表面より約10cmの点なので、湧き出し口はもっと高いはずである。したがって、①!部と③!部は長く手を入れておくことは出来無かったが、⑦!部は手を入れておける。温度、色合いと頂部の大きさ（目測）は同図表のとおりである。⑦!部の溜っているお湯は、①!部と③!部よりも濁りがやや濃い（透明度が低い）ものとなっている。

図(表)-15

	温度（湧き出し口）	溜り湯の表面色合い	頂部の大きさ（目測） （最長部2方向と深さ）
図-6の①!	51度（50数度?）	透明（湧いているのみ）	2m、1.5m、-
” ③!	51度（50数度?）	透明（底が見える）	40cm、60cm、20cm
” ⑦!	41度（40数度?）	不透明（底が見えない）	2m、1m、-

後藤幸任著「出羽三山絵日記（杏林堂）」には「・・・約50度の鉄分を含んだ『含塩化土類食塩水＝温泉』が流れ。その中の水酸化鉄が空気に触れて酸化鉄となり、次第に褐鉄鉱（鉄の酸化鉱物）として沈殿重積して^{りんじょう}燐状になった・・・」と書かれている。

そこで、塩辛く鉄錆びの臭いがあるというものの化学的な主要成分を知りたく、専門の水質分析会社に依頼した。その結果は図-16のとおりである。なにしろ結構な料金がかかるので上位二つの水質要素（対象物）を抽出するように依頼したものである。

塩化物イオン Cl^- （旧呼称は塩素イオン）は8,060[mg/L]、これは水道水基準値200[mg/L]の40倍を含有している、また、2番目の鉄およびその化合物は33.2[mg/L]で同基準値0.3[mg/L]の110倍を含有しているとの結果になった。これは前記、舐めた時の味を裏付けた。

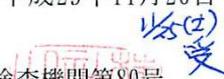
水 質 検 査 結 果 書				第 A1701160
				平成29年11月20日
大 沼 香 様				<div style="text-align: right;">  厚生労働省飲料水登録検査機関第80号 山形県登録番号山形県62水第9号 山形市松見町12番3号 株式会社 丹野 TEL 023-641-1191 FAX 023-641-1199 </div>
依 頼 者	大 沼 香			
受付年月日	平成 29 年 11 月 16 日	受付方法	持込	採 水 者
採 水 日 時	平成 29 年 11 月 9 日 11時00分	採 水 方 法	-	大 沼 香
天 候	前 日 - 当 日 -	温 度	気 温 -℃	水 温 -℃
試 料 名	-			
採 取 場 所	湯殿山の近く、山の中			
ご依頼のありました上記試料について分析した結果を下記のとおり報告いたします。				
検 査 項 目	単 位	検 査 結 果	基 準 値	
38. 塩化物イオン	mg/L	* 8060	200 mg/L以下	
34. 鉄及びその化合物	mg/L	* 33.2	0.3 mg/L以下	
-以下余白-				
判 定	-			
検 査 方 法	基準 : 水質基準に関する省令（平成15年厚生労働省令第101号） 検査方法：水質基準に関する省令の規定に基づき厚生労働大臣が定める方法（平成15年厚生労働省告示第261号）			
検 査 期 間	平成29年11月16日 ~ 平成29年11月20日			
水質検査部門管理者	理化学検査課長 村岡 喜博			

図 - 16

8. この御神体と一体を成す「御滝大神」

この御神体から流れ落ちたお湯の行き先は次のとおり。図-6において、一般の人は⑧点の所まで行くことが出来て、ここでも参拝する。そこに祭っている神仏は、図(表)-7のとおり「⑧御滝大聖不動明王＝御滝の神」である。その地点で足下の滝はまったく見えず、あるということさえ想像が付かない。梵字川の上流側から見える範囲は図-17のとおり。しかし、開山中は同図の様子は仮設の建物などにより見えない、というよりも意図的に見えなくしている。

下流側から上流に向けて御沢駆けをするとその突き当りが図-18のとおりである。要するに図-17の直ぐ下が図-18のように二筋の滝となっている。これが図(表)-7の「⑧御滝大神」なのだ。同図にあるとおり、結界の注連縄が張られていた。滝そのものが神・神社である。なお、直下まで行くことは出来なかった。あると思われる不動明王の像は確認出来なかった。

図-18の滝に向かって左(西)側の流れ水は岩の凸(男)部を舐めるように落ち、右(東)の流れ水は凹(女)部を舐めるように落ちている。なお、当然であろうが、水量が多ければ、滝筋は一つになるであろう。ここにも、男と女の個性体、時には合体した金胎両部界が現れて来る、自然の大いなる技巧わざのたくみに感心した。滝壺を露店風呂として、湯船代わりに浸かって見たいものである。



図-17

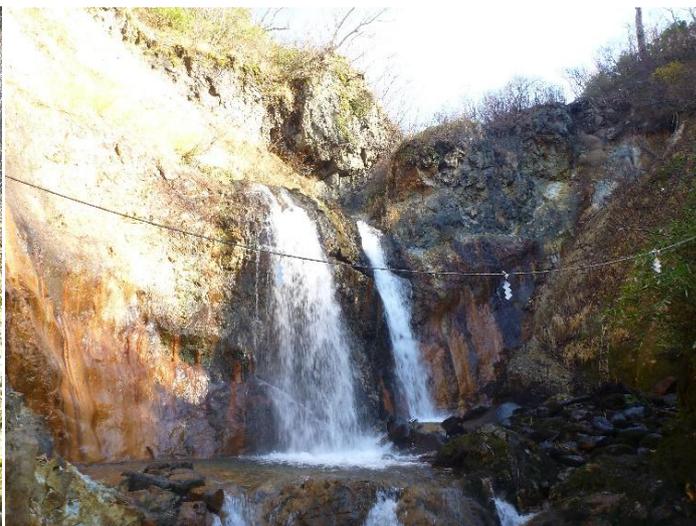


図-18

9. 御沢駆けに係るピックアップ写真



【 補 完 資 料 】

1. 密教の「八葉蓮台」

図 h-1 は、「アルゴディア歴史学習会（2013・H25年3月12日）」で配布された資料（大網大日坊 第95世貫主遠藤宥覚氏持参）より転用したものであります。

古来より湯殿山御宝前は金剛界と胎蔵界が融合した金胎両

部曼荼羅、智と理が冥合した世界である。智の右足が“丑・寅”の方位、理の右足が“未・申”の方向に位置していることから、丑歳と未歳をご縁年としている。さて、八葉蓮台の本を質せば、「中台八葉院」——胎蔵界曼荼羅絵図（図 h-2）の中央部に配され、大日如来を中心にして、八葉の蓮華状に東西南北（+ 正十字交差）に四仏、その四隅（× 斜径クロス交差）に四菩薩が配置——である。

「1.大日如来、2.宝幢如来、3.開敷華王如来、4.無量寿如来、5.天鼓雷音如来、6.普賢菩薩、7.文殊菩薩、8.観自在菩薩、9.弥勒菩薩」となっている。いずれにしても、形は八つの花卉を持つ蓮華と重ねている。密教に絡む様々な言葉や湯殿山御神体との繋がり进行時、「純雑混淆、

(注) シンクレティズム」の極みということが浮かんで来る。

(注) ウィキペディア (Wikipedia) によれば、その意味合いについて「相異なる信仰や一見相矛盾する信仰を結合・混合すること、あるいはさまざまな学派・流派の実践・慣習を混合すること。」をいう。真言密教の教主・宇宙実相の根本は大日如来である。大日如来は森羅万象を吐き出すエネルギー源、それはすなわち大日如来を民衆レベルに落とし込み、娑婆界にデフォルメした信仰のシンボリック的位置付けを、同如来の持つ無限の包容力からしてシンクレティズムの世界と私が称しているものである。



図 h-1



図 h-2

2. 秘匿性

湯殿山の御神体の靈力を最大限に高めるために、湯殿山側は、「語るなかれ」「聞くなかれ」と厳しく戒めて来ました。内部の状況はもちろんのこと、行ったことも見たことも一切他言無用と言われて来ました。松尾芭蕉は元禄2年(1689年)6月7日(新暦7月23日)、羽黒山⇒月山(山頂小屋に宿泊)⇒湯殿山にお参り、⇒月山⇒羽黒山(南谷)に戻っており、その南谷で詠んだと言われる俳句が、

「語られぬ湯殿にぬらす袂たもとかな」である。

細かいことは、他人に話すことが固く禁じられているので、これ以上は筆を止めて記さないことにしたとのこと。図h-3は同本宮への入り口から月山(月光坂)への登山道数十mの所にある芭蕉のその句碑である。ところで、『ぬらす袂かな』について、次のような二つの意味・赴きがあるとのこと。笹沢信責任編集の「出羽三山文学紀行集成(一粒社)」に記載の内容によると次のとおりである。



図 h-3

一つは、湯殿山は古来「恋の山」とも言われた、恋の意にかけて袖そでを濡らすということを詠った藤原顕仲(新勅撰集)の短歌「恋の山しげき小笹の露分けて入そむるよりぬるる袖かな」を受けたこと。

二つは、この御神体のお湯に袂を濡らしたということ。

現在でも開山中の写真撮影は厳禁、参拝は土足厳禁という厳しい戒めで人々を縛っている。しかし、今日は、撮影に支障物は無い、邪魔物が無い、障害となる邪魔者がいない、まったく自由で開放的な空間を独り占めして来た、じっくり観察しそこら中に手を触れて来た。

3. 周辺一帯の温泉の有無

周辺一帯(図h-4)の温泉湧き出しの有無について眺めて見る。総奥の院(御神体)より上方、つまり月山に至る登山道沿いには明らかな湧き出しは見当らなかった。

①; 参籠所から『湯殿山神社(御神体/総奥の院)』までの車道沿いにあり『丹生鉱泉』と表示されている場所からは、温湯ぬるが小さな流れとなって車道の方に至っており、皆の目に留まる。湧いていると言われる所は泥濘ぬかるみになっており、近くまでは行っているが、直接手を入れては来なかった。前出「出羽三山絵日記(杏林堂)」に依ると、この場所にこの鉱泉を利用し、30人ほどが泊まれる「石清水小屋」があった。源泉温度は20度程で泉質は無色透明の弱酸性と書かれている。また、同所と御沢橋との間の車道沿いには、岩肌が黒褐色に変色した滝上の小川が数か所ある。

②; 『御沢橋』から梵字川筋の『御沢(仙人沢)』の両岸には、奇岩や洞窟があり、自然を神格化した御沢仏が点在しているが、中には岩肌が黒褐色の川筋もあり、明らかに鉱泉の影響と思われた。つまり、ここ一帯の黒褐色の流れは①の源泉が影響していると思った。

③; 少し離れた北西の『にがり池』の所は、旧六十里越街道からは少し離れており、一般の人は立ち寄らないが、溜水たまりみずは薄い褐色に濁っており、昔、この近くにあった笹小屋ではこの「にがり」を使って豆腐を作って行者に振る舞ったとのことである。



図 h-4

さて、湯殿山参籠所のことであるが、食事・宿泊が可能であり、地下には「丹生鉱泉御神湯風呂」を設置していると、ホームページに記載されている。なお、開山中は総奥の院に「足湯」が設置されていた。

4. 湯殿山参籠所の祭壇

図 h-4 中の参籠所は宿泊施設にもなっているが、その内部の祭壇は神仏混交の状態となっている。図 h-5 は千歳栄氏著書「日本人の原風景—神仏和合の実相」(非売品/公共図書館にあり)からの拝借したものである。



参籠所内の祭壇 左・靈祭殿(仏) 右・神殿(神)

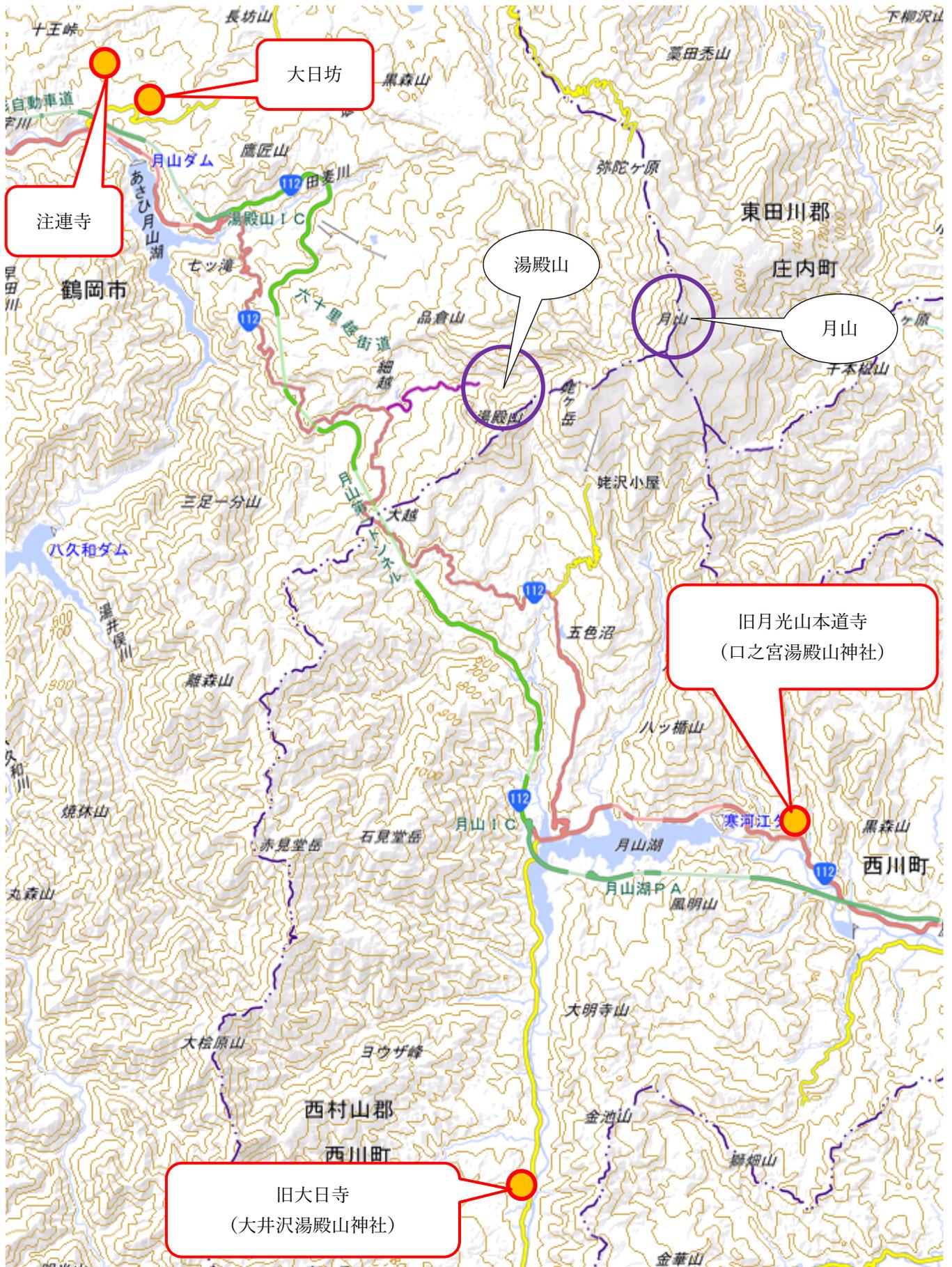
図 h-5

私も 2008(H20)年 7月 20 日(日)に参拝し確認している、まさしくこのとおりだが、私のカメラでは広角範囲が狭くこのように全体が入らなかった。正面（向かって右側）には神殿があり、左側には霊祭殿（私は祖霊参拝仏殿と名称付け）が祀られている。神仏が同列・同座の位置関係にある。現地を見た感覚では、どうみても仏式の仏壇と見たが、神社側は神式による祖霊の祀り方だと主張するだろうが。神職・神官の表向き・建前は仏式などということは絶対忌避だろうが、人間の心としては仏式容認であろう。れっきとした宗教法人「月山神社出羽神社湯殿山神社（出羽三山神社）」の施設である。今の神道に生きる仏教施設との並列である、シンクレティズム（純雑混淆、雑混受容民族）の私にとってはとてもうれしくなった。

5. 湯殿山派 4 か寺

湯殿山別当として、湯殿山の信仰を仕切り、真言宗を貫いて来た 4 か寺について、個々の縁起、歴史については触れないが、場所だけを後記図 h-6 に掲載する。七五三掛注連寺、大綱大日寺および旧本道寺（現在の口の宮湯殿山神社）は旧六十里越街道沿いに位置し、旧大日寺（現在の大井沢湯殿山神社／明治 36・1904 年火災で焼失）は同街道の志津から分岐して白鷹町黒鴨に至る「旧道智道」沿い（西川町大井沢中村）にあった。

私はこのような社寺に参ると、西行が、伊勢神宮参拝の時に詩った「何ごとのおはしますかは知らねども
忝かたじけなさに涙こぼるる」の心境と同じになる。



旧大日寺
(大井沢湯殿山神社)

旧月光山本道寺
(口之宮湯殿山神社)

図 h-6

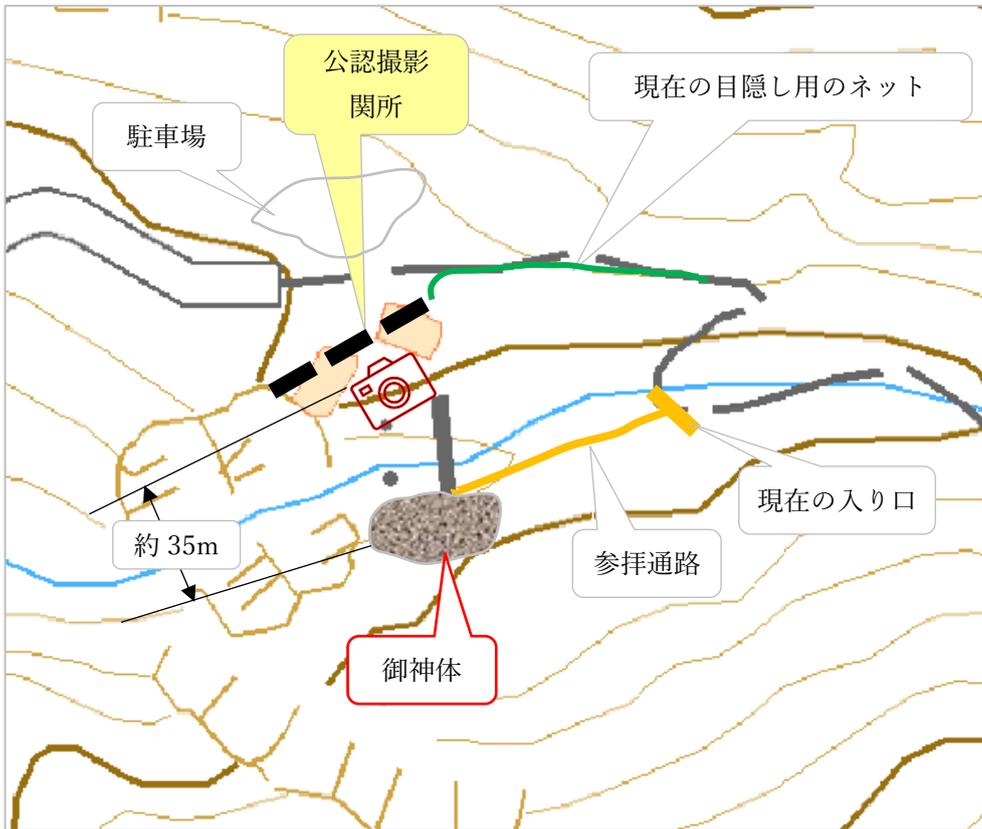


図 h-7

点から考えて見たらいかななものか。実現させれば参拝客は10倍増となるであろう。しかし私は、「女人女關」までもこの肉眼で凝視し、写真（電子データ）にも残している^{によけつ}ので、どうでもよいことだが、……どんな理屈を付けようとも地球上80億（大人60億）人とおりの賛否がある。何だかんだ言っても、ご神体は金銭云々ではないということで、撮影許可というのは当分有り得ないことであろう。

7. 製品ライフサイクル

上記で新製品の事前予告のことを取り上げた。ウィキペディア（Wikipedia）を参考に簡潔

に整理してみる。売上と利益の変化に着目して最適のマーケティング戦略を構築するための考え方である。縦軸は^(a)販売数と^(b)利益、横軸は時間である。

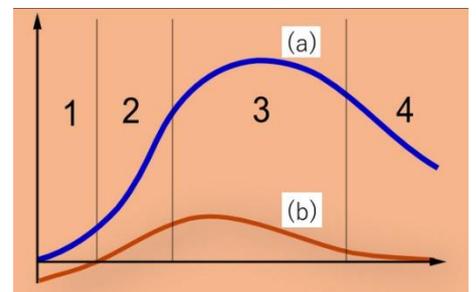


図 h-8 a

(1) 製品ライフサイクルの4つの段階、図 h-8 a を参照のこと。

1 導入期；製品が市場に導入されて販売が開始された時点から、徐々に販売数が伸びてゆく期間

2 成長期；製品が市場で受け入れられ、大幅に利益が得られる期間

3 成熟期；製品が市場の潜在的購入者のすべてに行き渡り、成長期での販売の伸びに比べて減速する期間

4 衰退期；製品の売上が減少してゆき、利益もそれに伴って減少する期間

(2) 製品ライフサイクルの3つのパターン、図 h-8b 参照のこと。

A；成長急落成熟パターン

B；サイクル・リサイクル・パターン

C；波形パターン

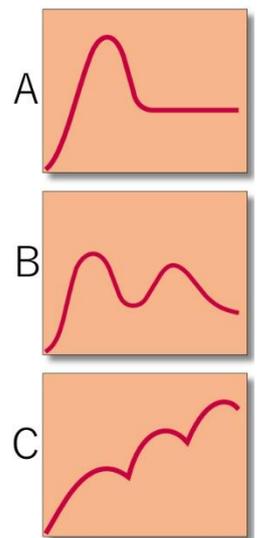


図 h-8b

大方は、AあるいはBのパターンで推移するでしょう。成熟期・衰退期を察知・予見して、顧客目線の先手を如何にスピーディに打つか、この視点と戦略が商売繁盛の成否に直結します。過去の成功体験拘泥の「殿様商売に勝機はなし！」さらには、Cパターンを狙うのか。

＝＝

【 最後に 】

このような 50 度もある熱いお湯が何時頃から噴き出たのだろうか。まさに地底のマグマの熱がこの地に噴き出ているのです。最初に誰が発見したのだろうか。何かの本に「今のような形になったのは、したのはというのがいいのかもしれないが、江戸時代になってからではないか」、と書かれていました。熱いお湯が湧き出るとは不滅のエネルギーの噴出であり、それだけではなく、この形が女体を想像させることと相まって、それは温い水に乗って生まれて来る人は本より動物の誕生に重ね、さらには雌雄の結合による五穀豊穡へ止揚し、篤い信仰に繋がって来たのだろう。

岩体からは、今にも噴水の如くの熱いお湯の大量噴出の発生を、あるいは微量の溶岩の吹き出しを想起させる神秘性を感じます。私は、人工的に手を加えて、つまり、削って今の形状にしたとは思えない、自然が生んだ奇跡の一つだと思います。日本列島は火山国であり、温泉が湧き出、間欠温泉が噴出し、奇岩怪石が横たわり、鉱泉が染み出ている所は全国各地に無数存在します。しかし、ここ湯殿のような様相のものは他にはないと思います。対面して全体を眺めていると、神秘性、妖怪性、不思議さのあまりいつまでも飽きない感じがしました。

この様な摩訶不思議な御神体に出会うと、この娑婆に跋扈し他人を見下げて馬鹿にする広域コミュニティの諸々の何とか長や、ローカル版似非識者などは取るに足らず、相手にならないということが浮き彫りになります。自然の偉大さは人為を遙かに超越しており、地球上 77 億人の人間が寄ってたかっても相手にされません。

ところで、周囲が雪で覆われた頃の御神体はどのようになっているのだろうか。どのような形を表現しているのだろうか、と想像するとさらに楽しみが増して来ます。その時期に何時かは行って見たいものです。とにもかくにも、夏の一部しか見られない隠された時期よりも神秘度が益々高まって来ました。

(end)